

オーストラリアで見たワークショップ展開のヒント

(特非) シビルNPO 連携プラットフォーム 常務理事

有岡 正樹

CNCP サービス提供部門では、本年2月にCNCP会員を対象に「第1回協働コーディネーター研修講座」を、そしてこれを受けて3月28日には同じテーマで「インフラメンテナンス国民会議」市民参画フォーラムを国交省で開催した。これについては本通信Vol.36(2017年4月号)で報告されている。その背景には国民会議立ち上げの過程で、その展開活動にワークショップ(WS)手法を取り入れて、その議論に関わる関係者の意見をあまねくテーブルに上げて合意を形成して行こうとの新しい試みがある。



上記通信の報告では、‘WSとは「複数の人間が集まって参加型で問題を解決するための手段」の総称で、シンポジウムや会議、研究会なども参加型で行えば広い意味でワークショップといえる。’とあるが、私も含めて、WSとはいくつかグループに分けて意見交換をするグループワークのことだとの勘違いであったのを教えられた。そうした経緯がまだ頭を離れないこともあって、先日のシドニー出張での2つの実体験に触れておきたい。いずれもオーストラリア国立ニューサウスウェールズ大学でのことである。

一つは、ある研究課題についての討論会である。日本のある大学の交通・物流関係の准教授のA先生が、4月から1年間の海外研究でその大学に派遣されており、ボタニー港というNSW州最大の港でのコンテナターミナルの運営と、その内地での取り扱いに関するインターモーダルについてが、一つのテーマとなっているようだ。テーブルに置かれた配布資料の数からみてその研究グループは10名程度のようなのだが、その日は部外者の私を入れて8名の参加であった。それが最初の研究会のようで、右写真右のNSW大学名誉教授Dr. John Blackがファシリテータとして口火を切り、自己紹介などに15分ほど費やしたあと、A先生が配布資料とPPTを用いて自分の日本での研究成果について報告を始められた。当然1時間余A先生が話を続けられ、そのあと質疑応答と意見交換といった日本での通常の進行を頭に描いていたが、5分ほど話が進み参加者の一人が質問や意見を述べると、ほぼ全員が事例、他の研究者の紹介など、矢継ぎ早に意見を交わし出す。ファシリテータはそれを遮るのではなく、むしろけしかけている風でもある。それだけで5分~10分となる。そうした事象を5、6回繰り返して会は終わった。A先生は配布した資料の半分ほどを説明したのだろうか。最後にファシリテータのJohnが、3点ほど要点としてまとめ、参加者のB先生にはデータ収集支援、C博士には専門家との意見交換の場のセットなどと、具体的に指示して研究の車輪が回り始めていく。

CNCPの運営会議でも、報告がどうしても主になってしまうことへの反省しきりであった。

二つ目は、それが終わって学内を歩いていて、とある教室の2か所の窓に貼られた右写真に示すようなポストイットに目が止まった点である。中を見てみると5~6グループでWSの一部としてグループワーキング(GW)を展開しているようだ。あるグループは黒板に、ほかのグループは壁にといった具合に思い思いであるが、意見の系列化など、我々が最近勉強したばかりのことを当たり前のようにやっているようである。日本の就職試験でもグループ討議などが課題として与えられる昨今である(日経2017.6.1春秋)。そんな状況下日本の大学でもこうしたGW手法が一般的なのであるが、教室の窓まで使うといった思いつきに、つつい頬が緩んだ。最近の特に極端な多民族化を乗り切ろうとしている力強さの一例とでもいおうか。

